

## 第2章 S G H 研究開発 5年間の成果と課題（総括）

### ○ 概観

5年間の事業において、本校はいくつもの変化を経験することとなった。そして最終年度を迎え、教職員の主体的な議論を受けて改訂された次なる教育課程において、本事業における取組は、その一部を改編しつつ骨格部分を発展継承することになった。このことから、当初目標の一つ、関係機関との協働によるグローバルな課題の研究に取り組むカリキュラム開発については、まずは達成されたものと考えている。

また、計画した事業については、ほぼ予定どおり実施することができた。数値目標については未達のものもあり検討と改善が必要と考えているが、事業全体を通して大きな支障とはなっていない。

生徒の育成を始めて社会に出るまで原則7年間以上の時間が必要な後期中等教育での事業において、5年間という時間の中で「使命感と実行力のあるグローバル・リーダーの育成」が実現できたかについては判断が難しい。それでも、S G Hという名称、コンセプトで本校が事業を進めてきたことについては保護者、生徒に十分認知されてきており、その成果は今後現れてくるものと期待される。

このように、S G Hという名称が一般に定着し始めたこのタイミングで事業が終了することは誠に残念ではあるが、事業終了を機として次なる歩みへと進んでゆくことに新たな意義を感じている。研究開発事業を終えるに当たり、これまで数々のご協力、ご支援をいただいた各関係機関及び先生方に感謝を申し上げつつ、以下各取組について個別に詳細を述べつつ総括したい。

### ○ 教科・科目についての成果と課題

#### [成果]

アクティブラーニングを取り入れた授業は、本事業の中核であった学校設定科目を担当する英語科、国語科、地歴公民科、情報科において定着し、細かい部分における改善を繰り返す中でマニュアルが適正化され、新しく着任した教員でもスムーズに実施できる態勢を作ることができた。これらの科目の中で、教科間の連携も実施できた。

#### [課題]

教科の枠を越えたコラボレーションによる連携は、「現代へのあゆみ」等の学校設定科目においては継続的に実施されたが、英語科と他教科の協力など検討されたもののこれまでの実施においてその成果が十分見えなかったものについては、発展させるには至らなかった。平成28年度「S G H中間評価」（以下、「中間評価」という。）において教科横断的な取組を充実させるようにとの助言があり、検討を続けてきた結果、今後「教科間の連携」という意味では、課題研究において各教科の役割分担を推し進める等の方法により実現を図るべきだと考えるに至り、今後への課題としたい。

### ○ 課題研究の指導に関する成果と課題

#### [成果]

次なる教育課程で「課題研究」を中心に、全ての教科が協力する体制作りが提唱されたことを含め、各教科において課題研究指導に対する指導方法の改善検討が進められている。そして、一人一人の教員がどのように指導を進めるかについてイメージを確立しようとしているところである。今年度末には、S G H企画部と教務部の連携により課題研究ルーブリックの素案を作成し、各教科代表を集めて評価と指導の計画、スケジュールについての提案を行う打合せ会を開き、活発な討議が行われた。

生徒について言えば、今年度の第3回「未来創造会議」（3年、全て英語による）においては、プレゼンテーションの方法に更なる向上が見られ、また「SGH課題研究発表会」（1、2年、日本語による）では、昨年度を上回る活発な質疑応答があるなど、生徒の参加意識・主体性が増してきていることが実際の姿にも見て取れる。

#### [課題]

課題研究の指導について、ルーブリックの実践を今年度中に進める予定だったが、十分実施することができず、年度末に素案の形で提案するに止まった。次年度以降にその活用実験を図る予定である。

生徒の発表については、「英語で書かれた原稿を読む発表会」から、自分たちの主張を英語でプレゼンテーションし意見交換する「会議」を目指して進み続け、年々改善が見られたと言える5年間だったが、その中で、これからは研究内容の水準がより一層問われることが明らかになってきた。発表の水準が上がる中で、指導・助言も年々厳しさを増し、生徒の想定を越える指摘をいただくようになった。運営指導委員会でも、「答えのない問いに挑ませること」「現場に出て研究に取り組むこと」など、発表を更に「研究」として水準に近づけるような指導をいただくことになった。今後の指導への課題である。

課題研究の内容や指導については、SGH事業の枠組から必然的に起こることであるが、地理歴史科を中心とした取組となる関係上、研究それ自体が文系の生徒にはイメージしやすかったものの、理系の生徒にとってはなかなか主体的に向き合うのが難しかったようである。このことは、最後まで課題として残った。

これから、課題研究に全校を上げて取り組む教育課程を維持し成果を上げるために、過度の負担となることなく教員が指導において主体性を発揮できるよう、また、理系の生徒も含めた全ての生徒が主体性をもって研究に取り組めるよう、教員研修、意識共有、教材作成、指導支援のための組織など新しい体制づくりを進めていく。

### ○ 海外研修、海外フィールドワークに関する成果と課題

#### [成果]

中間評価において事前・事後学習の充実について助言を受けたことを踏まえ、第2学年での海外研修（シンガポール）については、自主的・主体的な事前学習の実施に大きく時間を割く方向に転換し、4、5年目を経て学習計画が確定してきた。今年度の生徒アンケートによると、英語でのコミュニケーションについても自信を持った生徒が多く、また、日本とは違った先端技術を生かした社会のあり方に触れることができた、など、事前学習を生かし有益な経験・知見が得られたことが伺える。

また、2年アドバンストコースの海外フィールドワーク（オーストラリア）は、今年度3月で4回目の実施となるが、各年において交流校であるパイロンベイハイスクールには本校の期待する交流の趣旨について最大限の配慮をいただいております、毎回期待以上の成果をもって研修を終えることができています。

昨年3月に実施した3回目の研修でも、昨年同様、生徒の課題研究内容に関わることを中心に高校周辺でフィールドワークを行い、高校では授業体験とともに参加各班による研究発表プレゼンテーションを行って意見交換を実施していただいた。帰国後は、このフィールドワークで学んだことについて参加者全員で生徒対象に発表会を実施し、アドバンストコースを希望する生徒へのPRを行った。7月の「未来創造会議」では、このフィールドワークで学んだ内容を踏まえた発表を行うことができた。

#### [課題]

4回目となる第2学年海外研修については、事前調査の足並みがそろわず、特にインターネットで情報の収集が難しかった訪問先を中心に、十分準備できず研修機会を生か

せなかったといった声があがっており、改善が求められる。また、今回は全ての生徒に海外での研修を求めたが、アレルギー等の関係で海外での研修に二の足を踏む生徒・保護者が一定いること、また、そうでなくとも費用面で高額となる事情に鑑み、次年度から行き先を変更（シンガポール→台湾）して実施することになっている。今年度は、無理のない旅程を組み予定通りトラブルなく実施することができたが、次年度以降、現地についての情報等を改めて一から仕入れ直すなど、また対策が必要である。

4回目を迎える2年アドバンストコースの海外フィールドワークについては、研修内容について課題は特に無かった。ただし、連絡体制については、日本とオーストラリアの学期スケジュールの違い、担当者の変更等により、遅れが生じることが恒常的だった。たとえばある年には、ホストファミリーの情報が研修出発時の空港にようやく届くといったこともあった。海外の学校との連携について、教員主体に日本の学校スケジュールの下で進めることには限界があると思われる。もっとも、海外交流アドバイザーを置いていただいても、生徒に関することについては同様の問題を抱えるわけであり、この点についてはなお課題としたい。

## ○ 生徒の実態に関する成果と課題

### [成果]

生徒への意識調査より、本校がこれまで課題としてきた主体性、積極性などの面を含め、調査した多くの項目において、この5年間でポジティブな変化が見られた。一つの原因に、中学校時代からSGH指定校である本校を受験する際に高い意識をもって入学してくる生徒が年々増加していることがあげられるが、これも各年度において熱心に事業に取り組んできた生徒、教職員の活動の成果だと言えるだろう。SGH指定校を希望して入学してきた生徒らは、単にグローバルな教育プログラムへの関心が高いだけでなく、将来を見据えて自ら積極的に活動しようとする積極性にも優れており、周囲に対してよい影響を与えている。

学校外での研修や発表、コンテストへの参加もよく数値が伸びた。個人での海外ボランティア、大学の実施する発表会、全国高校生ビジネスグランプリ（日本政策金融公庫主催）への参加、JICAの主催するエッセイコンテストへの応募（今年度は国際協力特別賞（全国 Best20）、地域賞、学校賞を受賞）など、学校外における生徒の自発的な活動やその成果が見られた。一年間の課題研究の成果をもってSGH甲子園（関西学院大学主催）へと出場する生徒たちも、毎年熱意をもって準備に取り組んでいる。これらの取組は、事業終了後も継続することが可能であり、また継続することで更なる効果が見込めると考えている。

### [課題]

大学や関係機関と連携を進めていくこと、コンテスト等への参加を勧めていくことと、そのコストのバランスを最適な形で調整することには、依然課題が残る。また、不定期に飛び込んでくる海外交流のチャンスを、どこまで取り入れられる計画づくりをするかも課題である。

特に最終年度において、SGH事業が終了した後、どのような事業をどの程度継続していくことができるかを意識しながら取組を進めた。今後は、今年度想定した計画に沿って、計画を調整しつつ、SGH事業の遺産を生かしていくか、実践を通して検証していくことが課題である。

(参考資料)「課題研究ルーブリック」(案)

phase	目標	項目	達成の程度(評価)		
			A(到達レベル)	B(標準レベル)	C(改善レベル)
導入段階	課題を発見する	課題に関わる情報を集め、疑問や問題意識をもつ	課題に関わる情報を、結論に直接結びつかない範囲まで収集し、自己の好奇心・関心に基き疑問点を発見し、多角的な問題意識をもっている。	課題に関わる情報を収集し、疑問点を発見したり問題意識をもったりしている。	課題に関わる情報を収集できている。
		文献やデータベースの調査をする	過去の課題研究、文献、資料、Webサイトなどの二次資料に加えて、インタビューやアンケート、フィールドワークなど独自の調査も行っている。	過去の課題研究、文献、資料、Webサイトなどの二次資料に加えて、一次資料まで遡って調べている。	文献やデータを使用して調査できている。
		疑問を課題の形にして仮説を立てる	疑問を課題として形にし、それに対して仮説を立て、研究方法についても考察できている。	疑問を課題として形にし、それに対して仮説を立てることができている。	課題に対して、自分なりの疑問点をもつことができる。
研究段階	課題を解決する	自己の課題と現代社会の課題を関連付ける	自己の設定した課題を、SDG'sの枠組みと関連付け、自分のこととして実現可能な課題設定ができている。	自己の設定した課題を、SDG'sの枠組みと関連付けることができている。	自己の課題を設定するとともに、現代社会の課題を理解している。
		客観的な視野の下で資料やデータを集める	自己の仮説の論拠だけでなく、反論に必要な論拠を、独自の予備実験や調査を行うなどして集めることができている。	自己の仮説の論拠だけでなく、反論に必要な論拠も集めることができている。	自己の仮説の論拠を集めることができている。
		資料やデータを用いて工夫し推論する	資料やデータを有効に活用し、反論も十分に想定した上で説得力のある結論を導くことができている。	資料やデータを有効に活用して、仮説の検証を行うことができている。	資料やデータを用いて考察を進めている。
発表段階	自己を表現する	研究内容の全体像を理解し表現する	自己の研究の全体像を客観的に評価し、他者に分かりやすい形で再構成することができている。	自己の研究の全体像を理解し、自分なりの発表の形にまとめることができている。	フォーマットに則って研究内容を発表の形にまとめることができている。
		分かりやすい発表資料を作成する	発表のために、図表を的確に用いながら、他者に伝えるという視点をもって発表用資料を作成することができている。	発表のために、既定の手法、既定の分量で発表用資料を作成することができている。	自己の考えを発表の形にまとめ、型などの支援の下、発表用資料を作成することができる。
		発表への反応や質問に対処し的確に回答する	発表することで得た反応や質問に対して、それを理解し分かりやすく適切に回答することができている。	発表することで得た反応や質問を、理解し受け止めることができている。	自己の考えを発表の形にまとめ、質問等の反応を求められることができる。
最終段階	自己を実現する	地域の伝統、文化、自然等に対して深い関心をもっている	研究内容に深い関心を持ち、学習終了後もそれと関わる意欲をもち行動できている。	研究内容に関心を持ち、自己に関わる問題として考察を巡らせることができている。	研究内容に関心をもっている。
		周囲と協働して自己の目的を実現する	他者と協力しながら、周囲の考えや行動を自己の研究や目的の実現に生かすことができている。	周囲の考えや行動を自己の研究や目的の実現に生かすことができている。	他者の考えを参照しながら自己の研究ができている。
		研究と自己のキャリアを接続させている	研究内容が自己のキャリアの中でどのような意味を持ち、どのように自己の進路決定に生かしたかを自分の言葉で説明できている。	研究内容が自己のキャリアの中でどのような意味をもつかについて、自分の言葉で説明できている。	研究内容と自己のキャリアを関連付けることができている。